

フィンランド”紀行

写真 : JA3PYC 山本 哲夫
文 : JA3PYC-XYL 山本 裕子

ヘルシンキ港
世界遺産オムリナ島 (要塞島)へのフェリー



フィンランドは、日本に一番近いヨーロッパと言われるとおり、おおよそ9時間で到着します。そのせいか、フィンランド経由でヨーロッパの他の国に行くツアー客がとても多く、フィンランドで降りる旅行者は、案外少なかったのが驚きでした。空港からヘルシンキ市内までは、バスで約30分と近く、中央駅の前で降りしてくれるので、旅行者には便利です。ヘルシンキ自体は、こじんまりした街です。標識などは、フィンランド語とスウェーデン語両方で表記してあり、この国の歴史を垣間見ることができます。フィンランドは、教育水準が世界のトップレベルということで、ほとんどの人が英語ができるので、私のつたない英語でもちゃんと聞いてくれ、わかりやすい英語で答えてくれます。

また、街中、至る所にカフェがあり、カフェテリアスタイルなので、自分の好きな物を好きな量だけ取って、お金をレジで払えば良いので、習慣の分からない日本人には気が楽です。簡単な食事も、そこで済ませられるので、旅行中、重宝しました。

最近、日本で北欧のデザインが人気になっていますが、確かに、建築や家具、雑貨などおしゃれですね。ごちゃごちゃしてなく、スッキリしたセンスを、あちこちで感じます。

ヘルシンキからフェリーで1時間半ほど、バルト海を渡れば、バルト三国のひとつエストニアに行くことができます。エストニアの首都タリンは、世界遺産にもなっている古都で、城壁に囲まれた街を当時の面影をしのびながら、ぶらぶらしていました。ただ、世界遺産のため、観光客の姿は、ものすごく多く、にぎやかな観光地であることは否めません。半日で十分回れるので、ヨーロッパの雰囲気とロシアの雰囲気を合わせ持った古都を満喫して、その日のうちに、ヘルシンキに戻って来ました。

ヘルシンキ 世界遺産オムリナ島
エストニア タリンを望む



ヘルシンキからタリン(ES)へのフェリー 2時間



ヘルシンキ 世界遺産オムリナ島
展示されていた潜水艦の無線機



ヘルシンキ カフェ SUOMI
映画「かもめ食堂」のロケ場所 営業日(月 - 金)

また、別の日にバスで1時間半ほど離れたボルドーという町に行ったのですが、ヘルシンキから30分もバスで走ると、我々がイメージする森と湖のフィンランドの姿が現れてきました。その町も緑と湖に囲まれたかわいい町でした。フィンランドのあちこちに行ったわけではないので断言はできませんが、治安は良いし、生活のシステムなど合理的で分かりやすいですし、英語は、まず、通じますし、食事も魚介類が豊富なので、年配者が、のんびり旅行するには良い所だと思います。ただ、若い人には、刺激がないかなあ。以上で、私のフィンランド旅行のおおまかな感想を述べてみました。



エストニア・タリン 世界遺産 旧市街



ヘルシンキ カフェ「URSULA」
映画「かもめ食堂」ロケ地 くらげカフェ



エストニア・タリン 旧市街内
右下は射的場

モロッコ (CN) の旅

CNの旅

かつての首都であったマラケッシュ、喧騒と雑踏のメジナを後にして我々のランクルはさらに南へ、いや正確には南東へ、本日の行程は直線で300Km、約8時間のドライブである。この行程は今回の旅の中でも最も厳しいものとのふれこみであった。

CNは地形的にはオートアトラス山脈と呼ばれる高地で南北に分断されている。この山塊は高いところで標高4165mのトプカル山を頭に銀嶺が連なる部分もあり EU等からは登山の目的で訪れる連中もあるそうだ。緯度は日本の屋久島あたりと同等で、それほど雪深くなることは無さそうだが、冬の時期にこの山脈を越えることは矢張りそれなりの心構えが必要とか。とはいえ、我々は多少の防寒衣を用意するくらいのこと、あとは車の性能とドライバー氏の腕に頼るしかない。この山脈の南はサハラ砂漠に続く砂の世界になる。不安と期待をいだきながら、車は快調なエンジン音を響かせていた。



銀色に輝くオートアトラス山脈の峰々

昨夜のくじ引きの結果、今日はフセインの運転する車に乗ることになった。3人のドライバーのうち彼が一番英語が通じた。この国では日常、現地語のベルベル語、アラビア語、仏語そして所によってはスペイン語が使われているが英語はそれを必要とする人達の間でしか通用しない。他の二人のドライバー氏はかたことの英語、それもかなりあやしかった。昨日訪れたバイア宮殿の話から何人ものお妃の話になり、ところでフセイン、あなたの奥さんは？の話になった。彼は屈強な体格でひげもたくわえ、いかにもアラブ系？ベルベル系？歳のころなら30か、やや越えたくらいか、なかなかの風貌である。ハンドルを持っていた片方の手の人差し指を上にあげて肩をすくめた。「なんや、一人かいな、CNでは嫁さんは2人でも3人でも良いんど違うん？ガイドブックにそう書いてあったと思うけど」と冗談を叩くと違う、違ういまはCNも1夫1婦制や」と言ってまた人差し指を一本出して「俺はシングルや」「エツツ、なんで？」「そらシングルの方がズーッと自由で楽しいもん」「そらそうやな、どこの国でも一緒や」車のシートは前向き、同乗のご婦人達の顔は終ぞ観察できなかった。



黒褐色の山肌は所によっては岩脈を頭にみせている

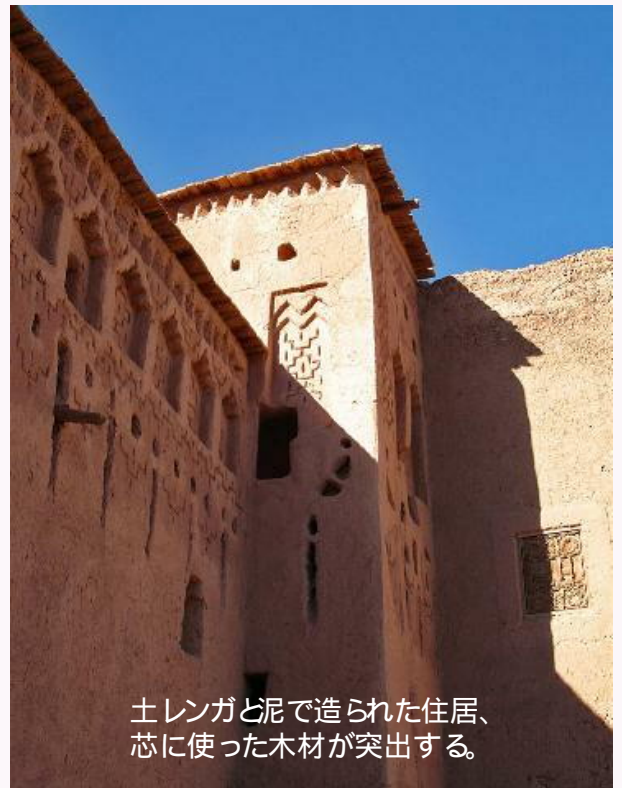
そんな会話が進む中、車は山の方向に突き進む。ときおりオートアトラス山脈の頂が銀色に光っているのが見え隠れする。道路だけは今までどう中央2車線は凹凸も無く綺麗に整備舗装され、その両脇には更にところによっては2車線、狭いところで1車線の地道の部分確保整備されていた。車の往来もさして頻繁でなく、まして人に会うことなど滅多に無い地帯、我々には不可思議に思えるほどの整備振りがあった。この国の政情はすこぶる安定しているようであるが、近隣には特異な政情の国もあり一兆ことが起これば重要な役割をはたす道路なのかもしれない。人口過密で狭い国土に閉じ込められている日本人にとっては羨ましい道路状況であった。道路が山岳地帯に差し掛かるや、たまに見られた人家も全く見られなくなった。さらに何等かの仕事につく人の姿、例えば農耕をする人なども全然見当たらない。ところが、実に不思議なことに、思わぬ所でポツンと一人、あるときは二人、道路わきに立っている人を見かけることがあった。急いであたりを見回すが、家らしいものなど何も無い。ドライバー氏いわく、放牧している羊の見廻りをしている人達だとか。まだ高地とまではいかないこのあたりなら、体ひとつで羊の放牧に都合の良いところを巡って歩くことも可能なのであろう。実に悠然たる生活ではないか。天候さえ良ければ青い空の下、うまい空気を吸いながら、暖かい陽だまりで一日を過ごす、暗くなれば休み、朝日と共に目を覚ます。羊と同じように行動する。何かしていなければ気のすまない日本人には、やってみたくてもとても真似のできない生活のように見えた。



カスバ？クサル？の広場に駐車したランクル達

ランクルはどこまでも快調である。行き交う車はほとんどない。高度をかせくにしながらあたる様相は特異なものに変わってきた。山肌は黒褐色とも黒灰色ともいえようか。その表面は一面の岩肌であるが、巨大な岩石がごろごろするのではなく大方は人頭大までの岩がころがり、場所によっては岩脈を頭にした地層がはっきりと確認できた。遠目には山容はあくまでもなだらかで優しいカーブを描いており、そのスケールの大きさは想像を絶するものである。日本で良く経験する谷あいの岩肌を切り開いて作った道路、谷の向かいの岩峰が迫り来るような、乗っているバスの最後尾は何時も道路からはみだして空中に尻をさらしながら走り抜けていくような。これとは正反対の光景がどこまでも続いていた。ときに葉もない低い灌木はみられるが、凡そ植物といえるものにはお目にかからない。そして谷底まではあくまでも遠く、深く、道路から定かに観察することは終ぞ出来なかった。峠にさしかかる手前から、道路わきには古い雪の塊が残っていた。2週間ほど前に積もったのだそぞだ。峠にはいずこも同じ飲料や土産物売りの店が一軒建っていた。駐車スペースは余裕の広さ、トイレ休憩もかねての停車であった。トイレは建物の一角にありしっかり間仕切りされた空間にあった。床や壁には鮮やかなモザイク模様がほどこされてはいるが、その床の中央に白い陶器の枠がはめられた簡素なもので、使用後は貯め置きの水をかける仕掛け、男女共用であった。店内は広く、多くのものが雑然と陳列されてはいるが、大別して陶製品即ち郷土料理のタジン料理に使う独特の形をしたタジン鍋、そして皿やカップなど、そして化石であった。化石とは異に聞こえるかもしれないが、数億年の昔、大陸が形成される過程で当時の海底が隆起して山塊をなす話は、門外漢の私にも容易に想像できる話である。大は一抱えもあるようなアンモナイトの化石から、古生代の魚の化石、小さな貝と思えるものなど雑多に並べられている。興味のある人にはたまらない掘り出し物もあるのであろう。聞きはしなかったが、あたる地形を見る限り、現地の人間は夫々に秘密の採集地を持っていて、苦労なくこれ等の化石を集めることが出来るのだろうことは想像に難くなかった。一休みの後、車は今まで登った高度をドンドンと下り始めた。降り注ぐ太陽の下、標高2260mのデイシュカ峠も何の苦労もなく越せたことは非常に幸いであった。あたる景色は一向に変わらず黒褐色の岩原がどこまでも続いた。岩漠という言葉の意味を始めて理解したような気持ちであった。

日本の山にはハリネズミのように送電線の鉄柱が立ち並び、山頂には必ず何等かのタワーが一本ならず見られるが、こちらでは半日走ってもそれらしい鉄塔に出くわすことはなかった。一箇所、不思議なものを見た。尾根のひだを回り込み、谷筋を渡る所で、そう古くもない橋が転がり落ちたように、ずっと下の乾いた谷底に横たわっている。谷筋といっても上を見ても下を見ても水なんか一滴も流れていない。ドライバー氏いわく「大雨だね」「エツツ？」そらそうかもな。木一本無いこの岩漠に一気に大量の雨が降ったときの谷筋の恐ろしい様相は、想像しただけでも背筋が寒くなった。峠から下り始めて1時間も経ただろうか、大きく波打つ尾根おねが次第に平坦になり、その中を緑の帯が一筋はるか彼方まで延びている。近づくに従って緑の灌木、やしの林、そしてその間に何か作物が植えつけられた畑が確認される。その背後には何としばらくぶりの土レンガ造りの民家が見えた。これがオアシスというのか。オートアトラス山脈に分け入って約4時間、初めて人の営みをうかがえる光景に出会って何やらホッとした。オアシスの周りは今までの黒褐色の岩原から、茶色い土の原野に変わっていた。オアシスはしばらくすると途切れ、一面に土の原野が広がる。これが土漠というのか。



土レンガと泥で造られた住居、芯に使った木材が突出する。



何か要塞的な雰囲気が残る



吹き抜けの中庭に
しつらえられたイコン

幾つ目かのオアシスに近づいたとき、ドライバー氏いわく、ランチはこの村でしましょう。街道筋からそれてオアシスの中心部を向こう側まで分け入った。真ん中あたりには河原と思しき所があるが、干からびて所々に水溜りが光っていた。街道筋からそれるや否や、道はカラカラの土の道に変わり、2台目 3台目の車には気の毒なことになった。テイフルウトのカスバと説明をうけた。1900年台初頭、フランスの統治が始まる以前は現地民ベルベル人が住み、外的の襲撃にも堪えられるように作られた村なのだそうだ。カスバとは要塞そのものを指す言葉で、村全体が要塞化されている場合にはクサルという言葉が使われるとかであるが、会話の障壁もあり正確に理解できているかは不詳である。崩れかけた土塼、崩れかけた土レンガ造りの民家を何軒か過ぎて急に回りこんだ所で車なら5~6台が置けそうな広場にでた。広場に面した建物には扉はあるが大きな窓もなく一見民家なのか疑問に思えた。車の音を聞きつけて先ず子供が、そして民族衣装の大人が数人、何事かというような顔つきで車の周りを取り囲んだ。ドライバー氏がいなければ一寸身構えてしまいそうな雰囲気であったが、一切気にせず車から降りドライバー氏に続いた。

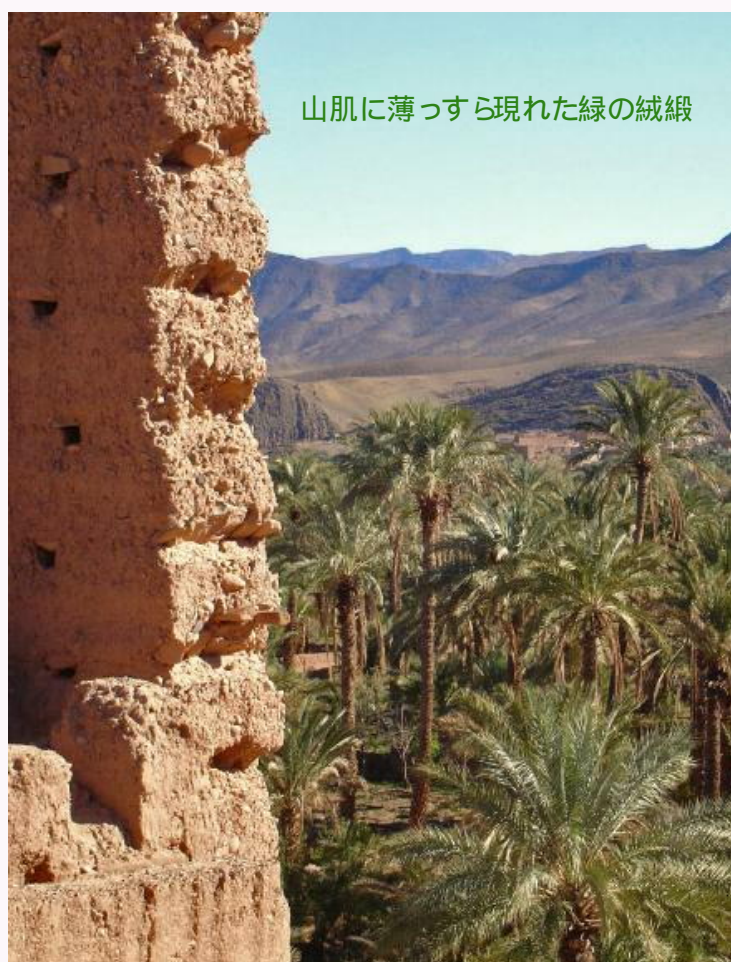
扉の開け放された一つの建物に入った。薄暗くて中はどうなっているのか良く分からない。アイコンと表現して良いのか、日本流には神棚のある中庭を通り、幾つかの部屋を通り抜けて階段を上がるとパットまぶしいテラスに出た。何組かのテーブルには真っ白いテーブルクロスが掛けられており、粉れもないレストランである。やしの葉で作った日よけなども小粋にしつらえられていて、外目からは想像もつかない光景に一同目を疑った。すでにDJの家族ずれと思しき一行が昼食を始めていた。あちらのテーブルでは矢張りEUからの旅行者か、女性二人のパーティーも食卓に向かっている。真冬ではあるが日光のさんさんと降り注ぐテラスでは長袖をまくりたくなるような暖かさ、女性連は日差しが気になって仕方ないほどの好天である。

テラスからの眺めもまた逸品で、オアシスの緑の向こうには土漠が、そして遥か向こうには長く連なるあまり高くない山岳地帯が見られる。不思議なことにその山肌は緑に染まっている。砂漠地帯では雨の後の一時、一斉に野草が芽を吹き開花して一瞬のうちにまた元の荒野に戻ってしまうのだそうだ。

心配された山脈越えも無事はたせ、昼食の後は目的地ザゴラまでオアシス街道をひとつ走り、暖かいテラスでの昼食は日本人らしくない、ゆっくりとした楽しいものとなった。



レストランには先客が



山肌に薄っすら現れた緑の絨緞



大阪国際交流センターラジオクラブ

大阪市ーサンフランシスコ市 姉妹都市
50周年記念局開局

8N3OSA 8J3SF

Osaka International House Radio Club

e-mail ji3zag@ja3.net

URL <http://ja3.net/ihouse>